

俳句随想 〔三百三十四〕

汀子

平成二十二年一月にホトトギスの若手の勉強会として三十年前に立ち上げた野分会はホトトギス主宰稲畑汀子より副主宰の廣太郎にバトンタッチした。それを受けて稲畑廣太郎はあらかじめ三月から勉強会を開始する旨、野分会の皆様の子細をお伝えした。東京で開催される会、芦屋での会を中心に勉強会に参加する資格が書かれてある。若い世代の方達の勉強の場はその俳誌の未来の存亡にかかっている。是非皆様のご協力を頂きたいと心より願っている。資格として年齢の上限、野分会に参加しての期間などに制限がある。

私とその勉強会に外れた人達に青芝会という勉強会を立ち上げると書かせて頂いた。その会の具体的な人数や内容はもう暫く検討させて頂きたい。この会が本当の意味でのホトトギスの勉強会となるようにと思うので慎重を期したい。どなたでも参加出来る大会に野分会の卒業生が出席して素晴らしい作品を発表しているのは本当に嬉しい。皆の中に入つてきらきらと輝いている。特別な会が無いのは淋しいという声も聞こえてくるが、三十年共に切磋琢磨してきた私はもっと淋しいのである。俳句は自分の感性を以て如何に客観写生の技が発揮出来るかの勝負でもある。

句日記 汀子

平成二十一年四月一日 清交社

風荒らし桜の耐へてゐる姿
又季節あしとどりして蝶を見ず
風強し蝶飛び雲の飛びゆけり
みよし野の桜に心つながりし

四月五日 関西野分會

刻々の花の堤を来られしか
水覚めてボートレースのはじまりぬ
四月五日 下南句會

初桜咲き進みぬし旅歸り
この池をふるさとせし蝌蚪の紐
咲きそめて咲きためらへる初桜
みよし野の旅の近づく初桜

四月六日 ロイヤル俳壇

咲き満つぎ花の心に踏み入りぬ
次々と過ぎゆく花の日々とこそ
花の如満ちゆく心あらまほし
のどけしや大役もほぼ終らんと
あるがまま行くが我が道花の旅

四月七日 芦屋ホトトギス會

今どこも花ならざるはなき世界
春の海近し潮の香松の風
より深く知る星のことあたたくし
道草のやうに桜の道を行く

四月八日 虚子忌(没後五十年)

五十年花の忌日を重ね来て
みそ野の旅路へつなぐ花の道
みそなはせ子規より虚子の花の道

四月十日 網業俱樂部

深呼吸一つ大きく春の山
入学といふ通過点越えしけり
花の旅出発通点に立ちけり

四月十一日 くつろぎ吉野山

風静か落花あらうとなからうと

第一句會

山桜より抜け出して来し人も
花一樹夕日を捉へはじめけり
臘月出てをりしかと問ふばかり
闇そこに桜眠りとどめて夜のこと
落降り追ふ落花とどめて夜の帳

四月十二日 くつろぎ 第二句會

花刻々夜明の色となりゆける
快晴の朝の緑の句碑として
この花の宿に縁の句碑として

第四句會

生涯の花の出逢ひを重ね来て
みよし野の花の通ひ路ある限り
はるかにも折るほかなし花の旅
さまざまへる落花の旅路追ふまじく

四月十四日 大阪俱樂部

春の雲脱がぬ辺りを富士と見し
通ひ馴れ訪ひ馴れ花の記念館
浅からぬ花の緑の旅路かな
仕らへし花の命の尽きる雨
昨日まで落花の風情ありしこと

四月十四日 網業俱樂部

春曉の太白仰ぎ旅に発つ
花の旅終へし安堵の雨の朝
花の旅終へしを待つてくれし雨
花の旅終へて落着く雨一と日

四月十五日 夏潮句會

水音の絶えて臘の庭となる
邂逅の絶えて別れ臘の夜
庭桜旅終へし身を置く館
咲くものもやがて散りゆく庭遅日

四月二十日 アサヒカルチャー

水音を纏と思ふ水音風の音
も音夏と思ふ水音風の音
宮様のお成りの展示春惜む

有恒俱樂部

句日に花の記憶の遠ざかる
虚子没後五十年展終へ遅日
紫荊池に映らぬ高さあり
事終へて遅日の予定組み替ふる
肩の荷を下ろし遅日でありこと
責任を果たし得しこと長閑かな

四月二十一日 無名會

永き日を使ひ果せし旅路かな
覚えなき春の星の名も魚忘れ
白鷺に知られし池の金魚かな
池を埋め尽くす落花はそのまに
星臘滞在長くなりし旅

四月二十三日 きざらぎ會

模様替してみたくなる日永かな
朝月の消えて日永のはじまれる
旅終へて旅ふり返る遅日かな
霞みても富士紛れざる所在かな
みよし野の遅日の旅を栞る日々
花は葉に次の一步を踏み出しぬ

四月二十四日 時雨會

開け放つままにありけり春障子
菜種梅雨家居の時間過ぎ易く
春祭らしき界限抜けて旅
春陰を置き初めしより消灯す
わが庭の桜薬降る旅歸り

四月二十五日 句會と講演の會

行春の静かな雨の朝かな
展示無事終べし安堵に春惜む
容赦なき子猫の爪でありしこと
石鹼玉吹けば大地のふくらみぬ
親猫の目のついて来る子猫かな

四月二十六日 野分會

一斉にボートレースの揃ふ權
朝は雨上りて夏を近づけし
群れ咲いて一人静でありしかな

廣太郎句帳

廣太郎

四月六日 はせを句会

花の黙人が毀してゆきにけり
戦の世隠しおほせず花万朶
折れ曲りながら落花の地に着けり
吹きを風に還してゆく落花

四月八日 虚子忌

朝桜忌日と知りてより零る

四月九日 土筆会

名苑の花に忌心をさめけり
落花敷きつめて水面の鎮もれる
囀を弾き零るる二三片
花屑の盛り上がりきて鯉となる

四月十一、十二日 吉野くつろぎの旅

六十の手習ひ談義亀鳴けり
舞ひたくて飛びたくて花満開に
如意輪寺年々遠くなりうらら
その一つ狐の為の花見ずし
春灯の下謀進みゆく
揺るること散ること忘れ朝桜
和来よ建来よ花の句碑の許
復活の主が舞はせたる落花とも

四月十三日 朝日カルチャー若草句会

四月十六日 登高会

人類を敵に回して蠅生る
みどりの日名無き祝日救ひけり
蠅生る五分の魂宿らせて
みよし野の絶景見んと蠅生る

四月二十一日 草木瓜会

花冷の吉野全山何か秘め
囀を集め五山の忌日寺
囀は二人の為のセレナーデ
父の如友のごとくに囀れる

四月二十一日 百夜句会

五十年続く忌日に囀れり
春雨や相合傘は君の手に
鞆の揺れて揺れざる恋心

四月二十二日 目黒学園句会

葉桜となりゆく都心副都心
二人消ゆ銀座の朧纏ひつつ
朧より生れておぼろに還る君
蜜探る蜂敵探す蜂出会ふ

四月二十五日 ホトトギス社句会

紐あれば毬あれば子猫の世界
拾たんちやふついで来ただけこの子猫

四月二十八日 着水句会

種痘待つ泣く子笑ふ子逃げ出す子
紫荊小さく志は高く
紫荊青空低くしてをりぬ

平成二十一年四月一日 一水会

春の夜やラヴェルマーラーブROOMS
菜の花やザルツブルクの丘を越え

四月一日 蕉心会

春の雲払うて行きし風ならむ
花三分後ろは四分前は五分
この風に耐へてこぼるる花はなし
先づ音の解けて水の温む館
春風に闘志の失せてある陽
春潮に白波立てる大河かな
蝌蚪寄りて離れて楽を奏でをり
満開を遅らせて亀鳴きにけり
水上バス遠足めける騒きかな
花の雲透けて青空あるばかり

四月五日 日本伝統俳句協会関東支部大会

春泥を彩つてゐる五六片
朝桜濠は古語らざる
こぼれたる花ひとひらの吐息かな
虚子忌へと繋いでゆける八分咲

鎌倉に吉野に東京の花に

曰くある句碑を逸れたる落花かな
徳川の世の語り部として残花
残花又残花芝公園の黙

雑詠

廣太郎 選

戦艦は沈みドックは露の世を 東京 大久保白村
 一湾をめぐり露けき話聴く 同
 散骨をせしはこの沖鰯雲 同
 大根煮なればまだまだ娘に負けぬ 神戸 山田弘子
 笑ひ茸でも進ぜたき漢かな 同
 タクシーをこぼれて七五三なりし 同
 闇汁や闇の味する一口目 芦屋 黒川悦子
 闇汁や箸の感触頼りとす 同
 闇汁の果てて眩しき灯かな 同
 色鳥の旅の一座の如く来し 福山 竹下陶子
 菊あればホ句あればわが八十路かな 同
 映りたる紅葉の彩となりし鯉 同
 躍る泡もろとも汲まれ新走 神戸 立村霜衣
 湯豆腐の少しふくれて揺れはじむ 同
 悴めばかへつて前へ進む足 同
 こぼれしはこぼれしままに種を採る 龍ヶ崎 今橋眞理子
 一枚をまた重ねたる柿落葉 同
 透きとほりゆく冬薔薇の白として 同

牡蠣船に語るホトトギスの未来 神戸 藤井啓子
 酔ひまはりたるか牡蠣船揺れあるか 同
 牡蠣船の中に二つも大広間 同
 潮の香と水仙の香と風二層 香川 湯川 雅
 思羽の群を抜くれば蹤く一羽 同
 盛り上り盛り上り果つ年忘 同
 路地の風初冬の息吹返す 東京 橋本くに彦
 水分を天に返して枯葉かな 同
 水底に幽閉されし散紅葉 同
 訪れる風に寡黙な冬木の芽 神戸 涌羅由美
 万葉の地に還りゆく落葉かな 同
 刈田の子かくれんぼより鬼ごっこ 同
 大根引く地球に戦なくならず 熱海 嶋田一步
 大根引く日本の真下ブラジルよ 同
 大根引き尻餅つけば富士ありし 同
 百寿なるわれに給ひし寒みまひ 同
 訪ひくるる灘の新酒を携へて たつの 浅井青陽子
 これと云ふわづらひも無く年暮るる 同
 冬鹿の瞳に遠き鹿の居り八尾 八尾 岩垣子鹿
 その中に呼べば来さうな鴨が居り 同
 一枝の挿されてよりの部屋の冬 同
 落ちかけて風にまた浮く冬の蝶 立川 日置正樹
 日溜りに翅が息する冬の蝶 同
 日溜りの消え冬蝶の消えてをり 同

雑詠句評（三月号より）

憲明・芳子・葉

とほ歩・静龍・中正

眞理子・保佳・むつみ

千鶴子・美奇・廣太郎

空といふ青い帽子で歩く秋 八尾 岩垣子鹿

帽子は、青い空だという。それを戴いてゆく。気宇の大きな感受である。空の青さを被るとはいえても、空の帽子を被るとまではなかなかいえない。そこに詩があり、いわれるとなるほどと納得させられる。「天高し」という秋の空である。どこに行ってもこの帽子はなくなることはない。そのもとの地球に足をふみしめて歩く。道もはてしなくつづいている。「青い帽子」の青は、青春の色でもある。夢と希望にあふれるみずみずしい句である。「青い背広で心も軽く」と歌謡にもあつた軽い気分の句としてもいい。

（憲明）

どこまでも抜けるように青い「秋」の空の下を歩く、という事は誠に気持の良いものである。一面そんな気持の良い情景が読者の目の前に拡がってくる。しかもその大空を帽子に見立て、自分が一人で被っているような表現から、これ以上季題を満喫している表現は出来ないだろう。（廣太郎）

啄木鳥の音を捉へし木の高さ 八尾 山下美典

啄木鳥は（小げら）（赤げら）（青げら）など種類が多い。樹幹を攀じながら鋭い嘴で幹をつつき、虫けらのありかを探しあてて、啄むという習性で、その時の音がドラムを叩く音に似ているといわれている。大きな木の太い幹にはその穴を見かける事も屢屢あるが、この句は啄木鳥が高い木の上で穴を空けているのであろう。鋭くひびく音が聞えそうである。「音を捉へし木の高さ」という表現が、新しく思わずふり仰ぎたくなる啄木鳥の叩く音が、頭の上から零れきそうである。（芳子）

山の中などで聞える「啄木鳥」が木を突いている音は・筆者は初めて聞いた時、意外に速く、まるで機関銃のようであつた事を思い出す。並べて山に居る鳥類は、その鳴声や、この鳥のように木を突いている音で気がつく事が多い。この「木の高さ」という一言で、立体感が生れた。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

下子選

生と死をわかつ一ひら落葉かな
東京 今井千鶴子
木の葉舞ふ良い人生でありました
同 稲畑廣太郎
秋晴や星のきざはしてふ視界
同 浅井青陽子
草動くよりはたはたとなりゆけり
同 後藤比奈夫
笹鳴を聞かざるままに山居暮れ
たつの
枯萩を刈るご案内名苑に
神戸
おのが身を宥め賺して老の春
同 後藤比奈夫
四面楚歌にはあらざれど老の春
同
神踏まぬ紅葉の綺羅を踏みにけり
福山 竹下陶子
爆撃の火の海を生き敬老日
同
一斉に森騒立ちし神の旅
東京 河野美奇
倒木のありしは昨夜の神渡
同 橋本くに彦
月明り通す目貼でありにけり
同
手習のいろはにほへと隙間張る
同
冬に入る朝が夕べになるやうに
大阪 佐土井智津子
人はみなゆつくり歩いて小六月
同
十句捨て残りし一句ホ句の秋
相模原 木村享史
露の世の道灌山の子規と虚子
同

凧に富士はだかつてをりにけり
熱海 嶋田摩耶子
落葉掃く一人に昨日今日同じ
同
家絶えし木犀大樹香を放つ
徳島 上崎暮潮
目で食べる日本料理秋灯
同
佐渡けふは近々と見え小六月
京都 安原 葉
正面の佐渡を恋ひ坐す像の秋
同
百景の富嶽初富士恋ふ心
樞原 稲岡 長
初暦深く秘めたる光かな
同
歩せば坂多き東京秋時雨
熱海 嶋田一歩
新幹線車窓の富士も暮早し
同
燈四百極め紅葉の百の色
神戸 山田弘子
人声を寄せて散らして萩黄葉
同
落葉てふ昨夜の風音踏んで来し
同 長山あや
石舞台小春にふはり浮きさうな
同
山茶花や枝折戸直す暇もなく
八尾 岩垣子鹿
ものみんな枯れゆく石もその中に
同
心底の一語一語や息白き
箕面 井上浩一郎
短日に身を置きすこし息を継ぐ
同

天地有情句評

汀子

順調に年を重ねて来た作者の老いは四面楚歌とは言えない。

神踏まぬ紅葉の縞羅を踏みにけり 福山 竹下陶子

神の留守の間に訪ねた神社の紅葉の綺羅。

木の葉舞ふ良い人生でありました 東京 今井千鶴子

一斉に森騒立ちし神の旅 東京 河野美奇

良い生涯を全うされたご主人への挽歌。

出雲へ神が旅立つ頃の風の荒々しい森が描けた。

秋晴や星のきざはしてふ視界 東京 稲畑廣太郎

月明り通す目貼でありにけり 東京 橋本くに彦

昼間の秋晴に約束された星空への階段。

冬、隙間風を防ぐ目貼りは月の光までは遮れない。

笹鳴を聞かざるままに山居暮れ たつの 浅井青陽子

冬に入る朝が夕べになるやうに 大阪 佐土井智津子

もう笹鳴く頃と訪れた山居への期待。

朝が夕べになるように自然の循環という悟り。

四面楚歌にはあらざれど老の春 神戸 後藤比奈夫

(以下略)